

新しい年の始まりに

聖火が、真っ白な雪のなかで灯っています。韓国・平昌（ピョンチャン）。6,100人の小さな村は、冬季五輪にわいています。そこから76億人の、とりわけ22億人の世界の子どもの心に、感動のシュプールが描かれています。

*

昨年（2017年）のハンド・イン・ハンド募金の全国のテーマは「子どもたちに生きるチャンスを」でした。大阪でも昨年12月23日に、募金活動が行われました（写真）。世界では今も10億人の子どもが貧困下にあり、6秒に1人の割合で、5歳未満の子どもの命が消えています。生きるチャンスさえ、与えられていないのです。

話は、20年前にさかのぼります。1998年の夏、西アフリカのブルキナファソを訪ねました。世界最貧国の一つといわれる、海のない内陸国。発電、医療、教育の代わりにあったのは、暗闇、感染症、児童労働でした。

砂嵐が襲ってくる「サハラ砂漠以南」という地形的要素もからんで、視力を損なう人も多く、まさに飢餓と貧困に抗う暮らしぶり。子どもたちは栄養不良、マラリアで亡くなり、トイレも足りず、安全な水も不十分でした。

そんな暗い思いが、師走に、少しだけ明るくなりました。ユニセフからのメールマガジンで紹介されていた「ブルキナファソ報告」。そこで、5歳未満で亡くなってしまふ子どもの数が「1,000人中89人」と紹介されていた

広がれ、いのちを育む輪



JR大阪駅前でのハンド・イン・ハンド募金。お母さんに渡された硬貨を募金箱に入れる女の子と受けとるガールスカウトの少女。温かい気持ちを手から手へ。撮影：前田美代

のです。

現地を訪れた20年前は、確か「200人-300人」。日本では「1,000人中3人」なので、「89人」はやはり深刻ですが、それでもしっかりと改善の道を歩いています。世界的に見ても、5歳未満児の死亡数は、1990年の1,260万人から560万人に大きく減り、栄養不良の子どもも半減した——と報告されていました。

もう一つ、メルマガを読んで思い起こしたことがあります。20年前、現地で出会った日本人の修道女の皆さんです。

当時のアフリカでは、部族によっては食ひ扶持を減らすために、「魔女」のレッテルを張られて、村を追い出される女性たちがいました。飢餓を避けるための、いわゆる「魔女狩り」の犠牲者たちです。やむなく町に出て、ホームレスの生活をする女性たちに、修道女の皆さんは居場所をつくり、就

労までサポートしていました。JICAや現地の日本大使館なども、手を取り合って活動していました。現場は、どこに行っても「ハンド・イン・ハンド(手に手をとって)」なのです。

写真展や出前授業など、2018年も大阪ユニセフ協会の活動は盛りだくさんです。子どものいのちを育む「聖火」を、みんなが手に手をとって、赤々と灯し続けていく…そんな、みずみずしい輪が広がる1年にしたいものです。

(平田篤州)

contents

活動フォトニュース 2
 追悼 山口昌紀さん 3
 シリーズ この人に聞く 第12回
 清水 健さん 4
 活動紹介
 アリス募金 6
 活動日誌(11月~1月) 7